皆旦さん附やろう解つてるがな同じ穴の狐やろう」
「こん……」
「誰やそんな事を云ふて……」
奥さんはお店で愚弄られたと云ふの額へ太い青筋がニュウと出ました臺所と店の取合の襖を腹立まぎれにピシャつと閉て内らへ泣てお這入りになりました。其處に針仕事を仕て居た女中が酢でも蒟蒻でも芋蛸南瓜が餡汁でもいかん、梁の上を通つてる鼠でも此女中がグウと一と睨み睨んだら落よと云ふ俗に猫いらずと云ふ女中で、
「マア御寮さん如何遊ばした、泣てござるやござりまへんか。どう遊ばしたのだす」
「アノお竹聞いとくれ、あんまり旦さんのお歸りが遲いのでお店へ聞きに出ましたんや、番頭に聞いたら帳面を調べていたんで知らなんだ、常七に聞いたら二番藏へ這入つてたんで知らん、太七にお前旦さん知つてやないかと云ふたら私は御當家へ十三から御奉公に參りまして當年二十八歳で十五年間明暮見て能う存じて居ります。旦さんは背のスラリと高い色の淺黑い眼のパツチリとした苦味の走つた美い男やとこんな事を云ひますね。源助と云ふたら存じまへんと何も云ふてエへんのんにモウ仰つしやるやろうと思ふて口開いて待てましたやなんて、同じ穴の狐やろと云ふたら誰やコンやと云ふて、妾が女やと思ふて皆が寄つて馬鹿にしてからに、ヒイ……」（泣く）

「奥さんマアさようでござりますか、お店へお出まし遊ばすな、お店は皆旦さん附きでござりますせ。妾は此間から何うもおかしい工合やと思ふて居りました。此頃旦さんが夜分家をチョイ〳〵おあけになりますので之は奥さんがあんまり音無しふしてござるからや少しは仰しやらんといかんがなアと思ふて居りました。今日もお出かけの時に定吉とんがお供をして參りました。今晩こそ旦さんがお歸りになりましたらチイと仰つしやれや、いゝへ妾が附いて居りましたら大丈夫でござります。少しは仰つしやれや」
「アノお竹、能う云ふて呉れてやつた、貴女ならこそや、妾の身になつて呉れる人は誰もあれへんね。アノな此の襟此間襟屋はんから持て來はつたんやが何んや妾に顔うつりが惡い樣に思ふのんで貴女やつたら常の襦袢の襟に掛けられるやろう、此の襟掛けとくれ」
「奥さん何を仰つしやるね、めつそうな其樣な結構な襟を女中風情が掛けましたら罰が當ります。エ、さようでござりますか、かへつて辭退は失禮に當りますで左樣なら遠慮なしに頂戴いたします。ほんまに奥さん仰つしやれや、男と云ふ者は惡性なものでござりますせ。お話をせんと解りませんが妾これでも世帶破りでござりますのん、妾の村にドンドロ坂に茂左衛門と云ふのがござりまして其所の息に茂吉と云ふ男がござります。それは〳〵美い男で毎年七月には村で盆踊りがござりますと村の若い衆が踊りますね、そうすると此茂吉が櫓の上へあがつて音頭を取りますがそれは〳〵宜